

外国語活動

外国語活動において、2 学年を通じ指導に当たって配慮することは何か。

1 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーション場面を設定すること。



ア 外来語など児童が聞いたことのある表現や身近な内容を活用する。
(例) コック → cook, チョコレート → chocolate, ドル → dollar,
バナナ → banana, ガソリンスタンド → gas station など

イ 取り扱う表現や単語は、複雑なものは避け、児童にとって理解しやすく、簡単な表現を活用する。
(例) I like～. Do you like～? I have～. Do you have～? など



※ 児童の発達段階や興味・関心にあった身近なコミュニケーション場面で、外国語でのコミュニケーションをさせることが大切である。

2 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。



ア 日本語とは違った外国語の音声やリズムなどに十分慣れさせるとともに、聞き慣れた表現から話すようにさせるなど、児童にとって過度の負担にならないように指導する。

イ 単なる表現の繰り返しの活動だけではなく、コミュニケーションの場面に応じた表現ができるようにするにはどうすればよいかなど、実際のコミュニケーションの体験の中で児童に気付かせる。

ウ 読むこと及び書くことについては、音声面を中心とした指導を補助する程度の扱いとするよう配慮し、聞くこと及び話すこととの関連をもたせた指導をする。

エ アルファベットなどの文字指導は、外国語の音声に慣れ親しんだ段階で開始するように配慮する必要がある。さらに、発音と綴りとの関係については、中学校学習指導要領により中学校段階で扱うものとされており、小学校段階では取り扱うこととはしていない。



※ 文字指導は、音声面を中心とした指導を補助する程度の扱い。

3 言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、ジェスチャーなどを取り上げ、その役割を理解させるようにすること。



ア ジェスチャーや表情などを手がかりとすることで、相手の意図をより正確に理解したり、ジェスチャーや表情などを加えて話すことで、自分の思いをより正確に伝えたりすることができることなど、言葉によらないコミュニケーションの役割を理解するように指導する。

イ ジェスチャーには、同じ意味を表すものでもその方法が地域によって違うものがあったり、逆に表情については、地域が違っていてもよく似た意味であったりするなど、ジェスチャーや表情を比較する中で日本と外国との違いに気付かせ、多様なものの見方や考え方があることに気付かせる。



※ ジェスチャーなどを活用して表現させるなど、コミュニケーションを図る楽しさを体験させる。

4 外国語活動を通して、外国語や外国の文化のみならず、国語や我が国の文化についても併せて理解を深めることができるようにすること。



ア さまざまな国の生活や文化と我が国の生活や文化との共通点や相違点に気付かせる。

イ さまざまな言語に触れたり，人々の日常生活に密着した生活文化や学校に関するものなど幅広い題材を取り扱ったりすることで，児童の興味・関心を踏まえ，特定のものに偏らないように心がけることが重要である。



※ 知識の伝達に偏らないように注意する必要がある。